ARTS COUNCIL TOKYO

当日レポート

2026年11月12日
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

延べ7,500人が参加！
「だれもが文化でつながる国際会議2026」が閉幕
“ともに考え、ともに動く”「Moving Together」を体現した5日間


ギャラリー（展示）風景


カンファレンス セッション3「Moving Together 夢とともに生きる」の様子

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京は、2026年10月28日（水）から11月1日（日）までの5日間、東京国際フォーラムにて「だれもが文化でつながる国際会議2026」を開催しました。会期中は延べ約7,500人が多彩なプログラムに参加しました。

2022年から隔年で開催し、3回目となる今年のテーマは**「Moving Together ともに生きる文化」**。
これまでの議論や実践を振り返りながら、一人ひとりがよりよく生きるために芸術文化に何ができるのか、そしてこれからの共生社会やウェルビーイングのあり方を探りました。

会期中は、アーティストや研究者、実践者らによる対話を中心とした「カンファレンス」、ワークショップやパフォーマンスなどを通じて参加者と登壇者が交流する「スタジオ（ネットワーキング）」、アーティストの作品や多様なプロジェクトを紹介する「ギャラリー（展示）」の3つの会場で、さまざまなプログラムを展開しました。

会場では、登壇者の言葉に耳を傾けるだけでなく、自ら表現する人、作品の前で立ち止まる人、初めて出会った参加者同士で言葉を交わす人など、一人ひとりが自分に合った方法で芸術文化にかかわる姿が見られました。異なる文化や身体、価値観をもつ人々が同じ場を共有し、それぞれの方法でプログラムに参加する光景が広がりました。

各プログラムのレポートは、次ページ以降でご紹介します。

開催概要

事業名	：	クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー だれもが文化でつながる国際会議2026 （略称：「だれもが文化でつながる国際会議2026」）
開催期間	：	2026年10月28日（水）～ 11月1日（日）
開催場所	：	東京国際フォーラム （東京都千代田区丸の内3丁目5-1） 10月28日（水）～ 11月1日（日）：ロビーギャラリー 10月30日（金）～ 11月1日（日）：ホールB5、ホールD5
主催	：	東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
参加人数	：	延べ7,500人 （会場・オンライン参加）
参加費	：	無料
使用言語	：	日本語、英語、日本手話、国際手話 ※同時通訳、字幕あり（国際手話はホールB5のみ）
公式ウェブサイト	：	https://creativewell.rekibun.or.jp/creativewell-conference/2026.html

各界で活躍するアーティストや実践者、研究者とともにウェルビーイングを捉え直す

カンファレンス

カンファレンスでは、3日間にわたり全5回のセッションを会場とオンラインで実施しました。モデレーターを務めたのは、アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト]で多数の企画をキュレーションしてきた堀内奈穂子とロジャー・マクドナルド。国際的なアートシーンに長年携わってきた2人が各回の対話に伴走し、セッションごとに生まれた問いや議論を次の登壇者や参加者へとつなぎました。本レポートでは、その中から、人間以外の多様な存在との関係や、災害・社会の変化のなかで生まれる新たなつながりについて、3名の異なる実践が交差したセッション1「しなやかな共助」を中心に振り返ります。

○支える、支えられるを超えて。変化のなかで関係を育む、セッション1「しなやかな共助」



セッション1「しなやかな共助」


左から瀬尾夏美、クリスティン・ウォン・ヤップ、森下有


セッション1の様子

10月31日(土)に開催したセッション1「しなやかな共助」には、研究教育者で東京大学生産技術研究所 特任准教授の森下有、災害の記憶や土地の声に向き合いながら作品を制作してきたアーティスト・作家の瀬尾夏美、そして人々のウェルビーイングや帰属意識、社会的なつながりをテーマに活動するビジュアルアーティスト・社会実践者のクリスティン・ウォン・ヤップが登壇しました。

それぞれの実践紹介に続くディスカッションでは、災害や社会の変化、既存の制度やコミュニティのなかで感じる「動きづらさ」に対して、どのように関係を結び直していけるのかを議論しました。

瀬尾は、災害を目の前にしたときに感じる「何かしたい」という思いを、まずは行動に移し、他者とともにできることを見つけていく大切さを語りました。森下は、既存の仕組みを壊して新しいものに置き換えるのではなく、多様なものの関係性をなだらかにつなぎながら、ともに変わっていく視点を提示。ヤップは、アートを通じて人々の経験や声が意味をもつ場をつくり、他者とのつながりを育む実践を紹介しました。

また、会場からは「なぜ自分のことだけでなく、他者や次の世代のことを考え続けられるのか」という問いが寄せられました。これに対し、森下は人間は動植物など多様な存在との関係のなかで生かされていることを語り、ヤップは自身の活動を「種を植える」ことにたとえ、一つの実践が次の誰かへとつながる可能性に触れました。瀬尾もまた、他者とともに取り組むなかで、自分自身も変わっていくことの意義について語りました。

こうした対話を通じて、一方的に支える・支えられるという関係を超え、それぞれの経験や声を持ち寄りながら、ともに生きるための関係を育む「共助」のあり方を考えるセッションとなりました。



アクセシビリティ レポート①

さまざまな方法で“情報を受け取る”ための環境づくり

会期中は、だれもがそれぞれの方法でプログラムに参加できるよう、会場全体でさまざまなアクセシビリティ対応を行いました。ホールで行われたプログラムでは、日本手話通訳、国際手話通訳、日英字幕、音声ガイドなどを用意。参加者が自分に合った方法で情報を受け取り、参加できる環境づくりを目指しました。

パフォーマンスやワークショップなどのプログラムを通して、参加者と登壇者が交流を図り、身体性を伴った理解を促す場

スタジオ（ネットワーキング）

10月30日（金）から11月1日（日）の3日間、「スタジオ（ネットワーキング）」では、トーク、パフォーマンス、ワークショップなどを通じて、参加者と登壇者が同じ場に集い、交流するプログラムを実施しました。
本レポートでは、その中から、こどもから大人まで幅広い世代が参加し、それぞれの願いを一枚の旗に表現したワークショップ「わたしの『わたしは なれる』の旗をつくる」と、ろう者と聴者が、舞台作品『黙るな 動け 呼吸しろ』をともにつくる過程で生まれた課題や発見を語ったオープンミーティングをご紹介します。

○ わたしの「わたしは なれる」を描く。一人ひとりの願いが、一枚の旗に！



ワークショップ「わたしの『わたしは なれる』の旗をつくる」の様子

10月31日（土）のスタジオ（ネットワーキング）では、絵本『わたしは なれる』（green seed books、2025年）を手がかりに、参加者それぞれの「わたしは なれる」を絵や言葉で表現し、一枚の大きな旗へとつなげるワークショップを開催しました。
絵本の作者であるサンギータ・ジョギにとって、今回の来日は初めての海外渡航。「長い間思っていた夢が今日叶って、とてもうれしい」と涙を浮かべ、自身が読み書きを学ぶ機会を得られなかった経験から、女性たちに学び、前へ進んでほしいという願いを作品に込めたことを語りました。
参加者は絵本を囲んで語り合った後、古い着物の布に思い思いの姿を描きました。「いろいろな国へ行ける自分になりたい」など、多様な願いが一枚の旗に集まり、互いの夢や価値観に触れる時間となりました。そして、ここで制作した旗は翌日に開催されたカンファレンスのセッション3「Moving Together　夢とともに生きる」でお披露目されました。ジョギは、ワークショップやカンファレンスを通じて、「夢を見ることは悪いことではない。でも、それを現実にするには勇気が必要」と、自身が一本のペンを手に夢を現実へと変えてきた経験を語りました。

○「ろう者」と「聴者」の協働のプロセスのなかで生まれた課題と発見を語る

10月30日（金）には、昨年開催された世界陸上・デフリンピックの文化プログラムとして制作・上演された舞台作品『黙るな 動け 呼吸しろ』を振り返るオープンミーティングを開催しました。ろう者と聴者がともに舞台作品をつくる過程で生まれた課題や発見を、出演者や演出家、舞台制作に携わったスタッフらが共有。第1部では、ろう者と聴者の身体性の違いを踏まえた舞台空間のあり方や、ろう者が舞台芸術のつくり手として参画する可能性について、第2部では、ろう者の感覚や身体性に根ざした「オンガク」の探求について語り合いました。
上演後も創作の過程を振り返り、そこで得られた経験を今後の舞台芸術のあり方につなげる機会となりました。



オープンミーティング 第1部 「身体と空間と表現」トークの様子



アクセシビリティ レポート②

自分のペースで“参加する・過ごす”ための環境づくり

会場では、刺激から一時的に離れて休憩できるカームダウンスペースや、サングラス、耳栓、フィジェット玩具などを備えたセンサリーキットも用意しました。
音や光、周囲の刺激の感じ方は一人ひとり異なることを前提に、必要に応じて休憩したり、自分に合ったアイテムを活用したりしながら、無理なくプログラムに参加できる環境づくりを行いました。

「クリエイティブ・ウェルビーイング」への芸術文化のかかわり方を、アート作品や国内外の取り組み事例として紹介

ギャラリー（展示）

○ アーティストが生み出す作品やプロジェクトの紹介を通じて、会議のテーマをひも解く



ギャラリー（展示）風景



宮島達男《Mutual Counterpoint》

ビジュアルアーティストのクリスティン・ウォン・ヤップによる《Life Lessons》は、人々が日常のなかで直面した困難や、それを乗り越えるために得た気づき、同じような経験をする人へのアドバイスを集め、活版印刷として表現した作品です。

寄せられた経験は一人ひとり異なり、困難の内容や大きさもさまざまです。しかし、どの経験もその人にとって大切な意味をもっています。個人の経験から生まれた言葉を作品として共有し、別の誰かへと手渡すことで、一人ひとりの声や経験がもつ価値に目を向け、他者とのつながりを考えるきっかけとなるものでした。



VR体験の様子

10月28日（水）午後から11月1日（日）までの5日間、ロビーギャラリーで展示を実施しました。

会場では、本会議のテーマ「Moving Together ともに生きる文化」と呼応するアーティストの作品や、東京都・東京都歴史文化財団による取り組み事例を紹介。宮島達男をはじめ、クリスティン・ウォン・ヤップ、ジュマナ・エミル・アブード、瀬尾夏美、是恒さくら、サンギータ・ジョギ、青木彬と碓井ゆいなど、多様なアーティストによる作品やプロジェクトが並びました。

なかでも注目を集めたのが、現代美術家・宮島達男による新作《Mutual Counterpoint》。宮島を象徴する数字のカウンターとともに、CNNやBBC、アルジャジーラ、ロシアの国営放送など、世界各地から発信されるニュース映像がリアルタイムで映し出されます。刻々と変化する数字と、その瞬間に世界のどこかで起きている出来事が同じ空間に立ち現れることで、私たちが生きる「いま」を多層的に映し出しました。

本作は、異なる旋律がそれぞれの独立性を保ちながら響き合う「対位法（Counterpoint）」から着想を得たもの。同時進行する世界の出来事と私たち自身の生を重ね合わせ、異なる立場や価値観が交差する世界で「ともに生きる」とはどういうことなのかを問いかけました。



クリスティン・ウォン・ヤップ《Life Lessons》

また、読み書きに困難のある学習障害「ディスレクシア」について理解を深めるVRコンテンツ「もしもディスレクシアの小学生なら」の体験展示も行いました。

小学校の教室を舞台にしたVR映像を通じて、ディスレクシアのあるこどもが学校生活で直面する状況を疑似体験するプログラムです。単に文字の見え方を再現するのではなく、こどもを取り巻く環境や周囲との関係に目を向けることで、誰もが自分らしく学び、生きていくために、社会や教育のあり方をどう変えていけるのかを考える機会となりました。

“ともに考え、ともに動く”「Moving Together」を体現した5日間

「だれもが文化でつながる国際会議2026」総括



モデレーターの堀内奈穂子とロジャー・マクドナルド



クロージングセッション「クリエイティブ・ウェルビーイング ともに生きる文化」

今回の国際会議では、人間中心にとどまらない世界の捉え方を出発点に、共助、アイデンティティ、尊厳など、さまざまな視点から「ともに生きる文化」のあり方を考えました。

オープニングセッションでは、他者や自然、環境との関係のなかで芸術文化がもつ可能性を問いかけ、続くセッションでは、災害や社会の変化に応答する実践、文化とアイデンティティをめぐる社会的な障壁、困難のなかでも自らの夢や尊厳を大切に生きる人々の経験が共有されました。クロージングセッションでは、これらの議論を受け止めながら、都市や社会における芸術文化の役割を改めて考えました。
また、今回は「カンファレンス」、「スタジオ（ネットワーキング）」、「ギャラリー（展示）」の3会場のプログラムが相互に連動する構成としました。言葉による対話だけでなく、身体を使った体験や作品との出会いを通じて、参加者がそれぞれの視点からテーマに向き合える場を設け、異なるアプローチを行き来することで、「Moving Together ともに生きる文化」を多面的に捉え、問いを深める機会となりました。

こうした議論や実践を通して、ウェルビーイングを個人が達成する状態としてではなく、他者や環境との関係のなかで、ともに生み出し、育んでいくものとして捉える視点が共有されました。また、芸術文化には、既存の価値観や社会のあり方を問い直し、多様な存在との新たな関係を創造する力があることも示されました。芸術文化のはたらきが、人々のつながりを育み、ともに生きる社会を支える力となり得ることを見据えながら、「クリエイティブ・ウェルビーイング」の意義と可能性を探る5日間となりました。

＜参加者の声＞

「オルタナティブなアートのあり方について話を聞きたいと思い参加しました。今回のセッションを通して、芸術や文化を人間だけのものとして捉えるのではなく、地球上のさまざまな生物とともに、これからどう共有していけるのかを改めて考えるきっかけになりました。」（30代・女性）

「自分も作品制作をしながら介護の仕事に携わっているため、以前から芸術やウェルビーイングについて考える機会がありました。登壇者の皆さんが社会の課題に真剣に向き合う姿に勇気をもらい、『自分もこうしたことを真剣に考えていいんだ』と、背中を押してもらいました。」（40代・男性）

「毎年参加しており、今年もさまざまなワークショップやセッションを楽しみにしていました。特に今年印象に残ったのは、ろう者と聴者が一緒に何かをつくるには、まず互いを知り、十分に話し合う時間が必要だということ。誰もが過ごしやすい環境を考えるうえでも、相手のことをより深く知る視点を仕事に持ち帰りたいと思いました。」（50代・女性）

「2日間で、カンファレンスの『アイデンティティと文化』や『わたしは なれる』のセッションに触れました。アートの力を信じ、社会をよりよくしていこうと考える人たちが集まっていることに希望を感じる一方、その思いを、まだアートの力を実感していない人たちへどう届け、ともに考える輪を広げていくのか。そこまで含めて『Moving Together』なのではないかと、これからも考えていきたいと思いました。」（60代・女性）

○本リリースに関するお問い合わせ
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
広報担当：関次、柳生
TEL：03-6256-8432 / E-mail：press@artscouncil-tokyo.jp

○本事業に関するお問い合わせ
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
事業部 事業調整課 社会共生担当
E-mail：info-cwt@artscouncil-tokyo.jp